幻の五輪「おもてなし」心得

1940年東京

家政学者の文章見つかる

戦争の影響で開催を断念した一九四〇年の「幻の東京五輪」を前に、街の美化や外国人への接し方などを説いた文章が見つかった。筆者は家政学の先駆者で東京家政学院（現東京家政学院大）の創立者、故大江スミさん（一八七五～一九四八年）。関係者は「おもてなしの考えは、二〇二〇年東京五輪・パラリンピック大会に生かせるものだ」と評価する。

見つかったのは、一九四〇年夏季五輪の開催地が東京に決まってから約五カ月後の三六年十二月、同学院の学生が発行した学友会誌に大江さんが寄稿した「改むべき事ども」と題した文章。冒頭で四年後に東京で五輪が開催されることに触れ、「さあ早速改めなければならぬ事の一つは次の通り」として①紙くずやたばこの吸い殻を公共の場所に捨てない②トイレは男女別に③外国人に親切丁寧にする―などを掲げた。

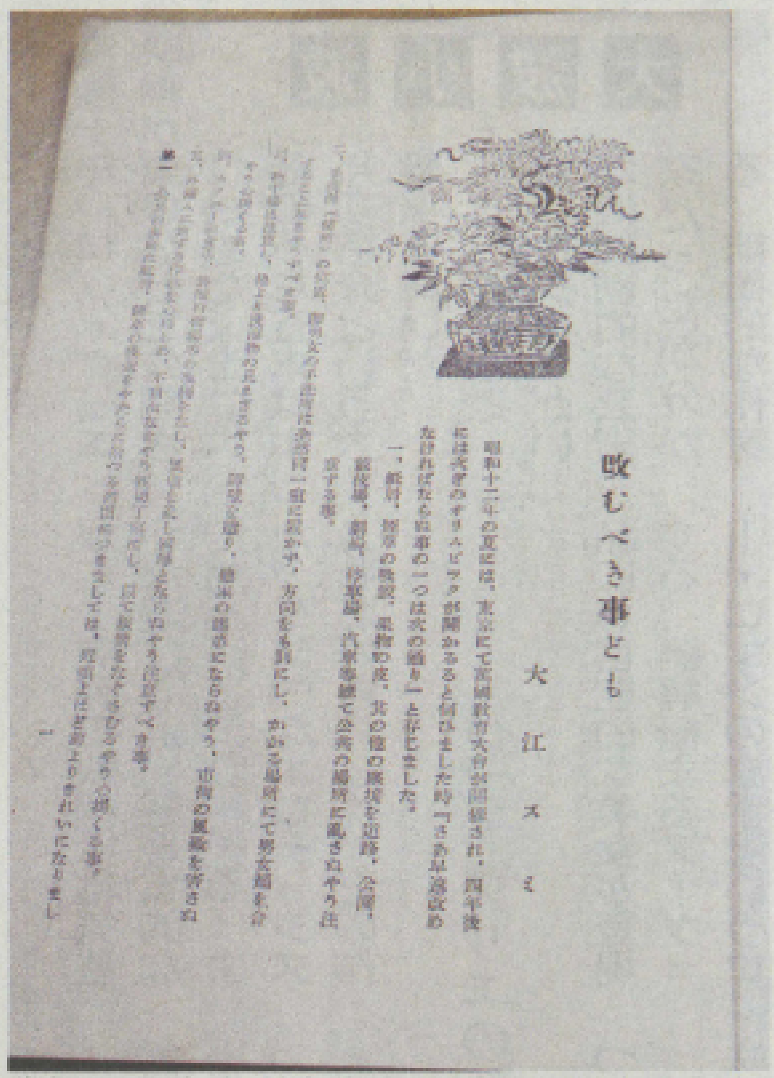
大江さんは、神宮外苑の競技場に行った際に通路が紙くずなどで「雪がふったよう」だったと批判。人が集まる場所でごみを平気で捨ててしまうのを「あさましき慣習」と嘆き、講演や演劇といった場で「全国民を訓練しなければ一朝一夕には直らない」と指摘している。

当時まだ物珍しかった外国人への接し方では「どの方も外国に旅して思うことは、その国の人の親切」であり、「他の国の風俗風習にひたろうと思う時、親切丁寧に案内されるほどうれしいことはありません」と、自身の英国留学経験を踏まえて説明している。

その上で「じろじろ見つめたりすることは礼儀にもかなわない」と注意した上で「とにかく親切丁寧に、不自由なきよう接待すべき」と、おもてなしの大切さを説いている。

「内容が今風だったので驚いた」と語るのは、この文章を発見した河村京子さん（六三）。東京家政学院大の卒業生だ。戦時中の空襲で学校にあった資料は焼失。学友会誌は卒業生が保存しており、同窓会に寄贈されたという。

河村さんが同窓会活動の一環で学校の歴史を調べていた際、偶然目に留まったといい「外国人への対応も含め、当時は最先端の考え方だったと思う。二年後の東京大会にも生かせるのではないか」と話している。


改むべき事ども

大江スミ

大江スミさんが東京家政学院の学友会誌に寄稿した「改むべき事ども」と題した文章

幻の東京五輪 当時の東京市が、紀元2600年（日本書紀に書かれた神武天皇即位からの年数）に当たる1940年の記念行事として五輪の開催を計画。36年の国際オリンピック委員会（IOC）総会で開催地に決まった。だが、翌年始まった日中戦争の影響で競技場建設に必要な鉄鋼が不足したことや、国際社会を中心に開催反対の声が高まったことなどから、38年に政府が開催辞退を閣議決定。IOCは代替開催地をフィンランドのヘルシンキとしたが、第2次世界大戦の影響で中止となった。

街の美化、外国人の接し方記す

「東京新聞2018年12月15日付（共同通信）」